

村野次郎 創刊

香蘭



2018年(平成30年)10月号

創刊95周年記念特集号

第95卷 第10号 通巻1054号



香 蘭

2018年(平成30年)10月号
第95巻 第10号 通巻1054号

創刊95周年記念特集号 目 次

グラビア	1
巻 頭 言	通過点は質素に、しかし爽やかに	千々和久幸
前衛短歌はどう乗り越えられたか	14
文学と時代背景 『新古今和歌集』の場合	36
近代短歌の系譜を読む	40
座談会 香蘭の明日を見つめて	渡辺(礼)・市川・伊藤(康)・松沢・丸山	62
『酔風船—Q氏のいたずら日記』を読む	78
馥郁と私 『酔風船』の一節に懷を借りて	82
『香蘭』誌の編集・割付・封入・発送等の対応状況	84
創刊九十五周年記念 会員自選「私の三首」	91
支部の現況	205
資料編 平成25年〜平成29年の歩み	234
年 表	234
香蘭賞・香蘭新人賞の人々	246
香蘭叢書・会員歌集	248
物故会員のおもかけ(平成25年〜平成30年)	252
明宝研究会活動記録	255
表紙絵	255
..... 香蘭短歌会のマーク「蘭の花」	目次カット
..... 和 田 和 雄

通過点は質素に、しかし爽やかに

——創刊95周年を新たな跳躍台に

「香蘭」短歌会代表 千々和 久幸

「香蘭」の創刊号は、大正12年（1923年）3月1日に発刊された。

表紙はマリ、ロオランサン、裏絵はポール、セシングで、総頁54、村野次郎の他に中河與一、中河幹子、金子薫園、前田夕暮、石野正太郎、冬野木枯（清張）などが出詠、寄稿している。巻末の広告欄には銀座通りの森田洋品店の名前も見える。定価は一部金四拾銭であった。

それから数えて95年、本年度はめでたく95周年を迎えた。「香蘭」は創刊主宰者村野次郎の作歌理念のもとに、「格調」と「気品」を尊び、けして派手ではないが、孜孜として堅実な歩みを重ねてきた。声高な主張をせず、歌壇とは一線を画し、結社の維持発展に努め今日に至っている。

これには創刊から昭和10年（1935年）まで、村野次郎が生涯を師と仰ぎ続けた顧問・北原白秋の強力なバックアップがあったことも書き添えておかねばならない。

「香蘭」の創刊号には、創刊の辞もなければ短歌観の標榜もない。即ちこれが師白秋に対する次郎の礼儀の尽くし方であり、「香蘭」の基本姿勢であった。

わたしは「香蘭」の歴史の節目節目で、「長きがゆえに尊からず」と言い、また「伝統に反逆するものこそが、もっともよくその伝統を継承する」と言い続けてきた。その思いは95周年を迎えたいまも不変である。伝統はこれに抗し、更新することがなければ単なる言葉の化石で終わる。この事実を95周年という誇らしい節目にあたって、改めて噛みしめたい。

多くの短歌結社がそうであるように、「香蘭」の95年の歩みが順風満帆であったわけではない。なかくずく第二次世界大戦後の未曾有の混乱期があり、昭和54年（1979年）には創刊主宰者であった村野次郎の死去にも遭遇した。また組織の運営には避けられぬ会員の離合集散も見えてきた。

村野次郎を継いだ主宰星野丑三は、次郎の作歌理念を忠実に実践すると同時に、次郎の全歌業を顕彰して「香蘭」の地位を高めた。次郎の全著作の刊行は、その精華と言っている。

かくして「香蘭」は、創刊以来村野家の変わらぬ援助もあって、今日に健在である。現在の「香蘭」は、全選者が出席する月々の本社歌会のほかに支部歌会、年に一度の全国大会、有志による月々の「明宝研究会」にそれぞれの会員が意欲的に取り組んでいる。また会員の歌集の刊行も活発で、「香蘭」叢書は着実に版を重ねている。

さりながら社会環境の変化とりわけ高齢社会の到来は、これまでの結社運営を根本から見直さなければならぬ局面に立ち至っている。会員の減少にともなう結社誌の刊行数の制限や合併、さらには休廃刊が現実化している。このような結社の存続が危機に立つ時期に、「香蘭」は95年を迎えた。

拡大より縮小を見据えた運営基盤の再構築が、喫緊の課題である。もはや会員数の多寡を論ずる時代ではない。少数ではあっても、いかに魅力的な誌面と闊達で心の通い合う作歌修業の場を作るか、が後進に課せられた課題である。95周年はそのことを全会員が自覚し、新たな出発を期する跳躍台と捉えることが出来れば、有意義な通過点となるであろう。

幸いにしてわが「香蘭」は、先人達の残してくれた物心両面の遺産を引き継ぎ、村野次郎の掲げた文学の灯を消すことなく前進を続けている。

このような情勢に思いを致し、95周年という一通過点は質素に、しかし爽やかに祝い、来たるべき100周年に備えたい。引き続き会員のご理解とご協力をお願いする次第である。



香 蘭

2018年(平成30年)10月号
第95巻 第10号 通巻1054号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌 (38)	伊藤(美)・伊藤(康)・石井・加納・西野	259
今月の特選		
近詠十五首「裡なる石」	大井田・坪・八木橋・水本	260
作 品	満木好美	262
一		264
二		267
三		279
推薦香蘭集		287
香 蘭 集		296
村野次郎への旅(103)		297
歌の生まれる場所(70)	千々和久幸	276
社告 選者の解囃・委囃	中島絃子	278
エッセイ・自由研究 「京都の夏」	馬場美信	294
魚 点(八月号) 家族を詠う歌	斎藤俊子	304
七 首 抄(八月号)	渡辺(君)・唐沢・小林(治)・西沢(君)	308
近詠十五首 「われの武庫川」評(八月号)	高 峯 憲 子	309
作品一特選欄評(八月号)	丸 山 三 枝 子	310
作 品 評(八月号) 作品一	柏 原 義 清	312
作品二	江 口 絹 代	314
作品三	波 田 壽 子	316
香蘭集	牧 野 道 子	318
黒羽(絃)・岡野・吉岡・山口・小林(治)・杉山(伊)	丸 山 三 枝 子	320
緑 地 帯	丸 山 三 枝 子	324
明宝研究会第九十七回七月例会	丸 山 三 枝 子	324
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動き		330
他誌拝見 94	松 井 芳 子	332
歌会及び会合・会員消息・他		333
編集後記		336

掛声をかけて立ちあがる老われを子ら見て笑
ふにわれまた笑ふ

村野次郎作品 私の愛誦歌 (38)

西野 美智代

退職後の生活を模索していた平成五年、私は江戸川区短歌連盟の「初心者講座」に入り、香蘭の金子美津子さんの手解きを受けた。二年程経った頃に紹介された村野次郎作品数百年の中に、掲出歌が含まれていた。

まず、よく分かると思えたことで敷居が低くなった。それに定型ではないし、「われ」と「笑ふ」と「て」が二度ずつ使われているが、それでも良いのだと親しみが湧いた。

和やかな場の空気、立ち上がる老人の動きと、周囲の反応が淡々と詠まれていると思っただが、二つの「われ」と「笑ふ」の微妙な差違や、ら行音の快い響き、然りげ無さの奥の豊かさに気付き、易しさと平明の別を知ったのは、ずっと後になってからのことだった。

簡単だと誤解し引き込まれたものの、行けば行くほど奥の深い森に分け入って二十五年、未だにとば口をさ迷い続けている私である。

〔角笈〕37頁、「村野次郎三百首」108頁に所収)

今月の特選



右は谷戸 川崎 伊藤 美恵子

「野菜の名十以上あげよ」主婦なればすらすらあげる十も二十もこの土地の長者の家にひよろひよろとしかし高々となつめの木ありホームより見ゆるトンネル抜けて来た電車はこの世の電車であつたいつにても狸は右から現れて左へ消える 右は谷戸なり梅干をひと粒ひと粒裏返すキケンと言わるる暑さの中に手をかけぬままに咲き出す花の色クロード・モネの画の中の色人気なき夕べの墓地の墓石は黙って立ってみんなやさしい

報道に優先あるらし豪雨被害よりタイ洞窟の少年達が最高気温記録更新のニュースあり 豪雨被害のニュースもうなし救助隊到着のごと出迎えるエアコン修理のお兄ちゃんを

報 道 東京 伊藤 康 子

虹色蜥蜴 東京 西野 美智代

暑き日を石垣つづく坂下り虹色蜥蜴のきらめきに遇ふ洗濯は止せだの水を飲めだのと予報士に言はれ傘を忘れる沖繩の痛みに疎く存へて慰霊の日けふせめて茶を断つ還暦の祝ひに贈りし腕時計アリスの穴に紛れ込みたり講演中いちばん前で眠りゐしが終へし途端にサインをねだる「疑つて」「騙されないで」女子アナが子への不信を毎晩煽る町内の文化遺産と言はれるし松の湯たうたう解体決まる

伸びやかな脚 川崎 大井田 啓 子

ストレッチ、脳活ウォーク、バワトレと日替りメニューはカタカナの文字うかうかとスポーツクラブに行きはじめまた増えました先生なる人日替りのトレーナーが胸元の名札を見せてはい始まりですできるだけ大きな歩幅で歩くことトレーナーの伸びやかな脚深呼吸は一番やさしい運動で窓辺の胡蝶蘭を見ながら先生の掛け声でスクワット繰り返す繰り返すほど終り近づくとバワトレで健康寿命が伸びるとふ信じる人に幸せがくる

象のうんこ 東京 坪 裕

水を飲め冷房かけると言うけれどクーラー壊れて死んで行きます太陽と地球との距離縮まったか日本列島炎上したり温暖化がどんどん進み日本が熱帯雨林になってしまえり

あああああ血管ひろげ「あ」の文字の流れ続けるような酷暑よ今日蟬が鳴いていたのよ老い母の耳に初音のやつと届けり参議院議員六人増やさずに立派な保育所六ヶ所つくれ

エアコンの風吹き付ける席となりシヨールに膝掛け着込んで勤務

フェイクニュース 習志野 石井 雅 子

地球磁場の逆転があり千葉時代と言ふ SNSでは「ブッキー千葉だつて」まがひものゆゑに気安く世をわたるフェイクの毛皮フェイクのニュース何がなし悔いの残れる一日にてカタバミの葉は日暮に閉ぢるバカボンのパパが寝転ぶ日曜日タオルの鉢巻き短パンをはき二か月の命の値段付けられてベットショップに仔犬は眠る辞書ひいて九夏三伏しらべたりエステサロンの暑中見舞に新聞見てテレビを見ては腹たてて暑さに負けて家に籠れる

この夏長し 多治見 加納 喜美

日本一暑い日となり炙られて身ひとつ庇う力尽きそう泥拘う被災地の汗ようどうなっているのか聴きたい地球の不満この暑さいつまで続く籠り居の老いの手遊び折り鶴千羽日除けです軒並み植えてぶら下がると見事な空中西瓜点滴に通うことだけ日課としご無沙汰ばかりのこの夏長し燃え尽きた遺骨の胸の当りには貴方の愛した画帳の金具この部屋がわたしの世界過去ばかり拾い集めているような日々

巨大なる象のうんこはサバナの窪地にしつかり産み落とされぬ

猛獣の自然の摂理サバナに産み落とされて激しく匂う那智の滝ほどではないが溢れでる汗に体がびっしり濡れるどじまぬけちゃんらららんであきつばい典型的なO型人間

シルクロード 埼玉 八木橋 洋 子

「悠久のシルクロード」と掲げたる現地のバスは日本語にしてホテル以外トイレに紙を流せない中国事情不便でならぬ足曳きて大宮駅を歩きしが今日シルクロードの荒野を歩く一日に優に一万歩越えているシルクロードは体力勝負幾度も平山画伯が通いたる敦煌に来てその心聞く出で立ちにはマスクに帽子にサングラス怪しい態で砂漠を歩く灼熱のトルファンの街滴れるわたしの汗を遺跡に残す

警報指示 倉敷 水本 美恵子

傘をさし肩を濡らして戻りたる昼には大河まだおとなしく屋根に降る雨がたちまち樋を越す梅雨前線今し停滞警報指示に西阿知地区は誰も出ず救急リユックを側に引きよす昼も夜も音たてて降る雨のよる倉敷中に爆破音ひびく爆破音は総社のアルミニウム工場とテレビのテロップにて知らざる年年に吉備真備のお茶会に通ひし真備がはずたになるハザードマップを見れば洪水の避難場所が近辺に無しと知りたり

裡なる石

満木 好美

子々孫々住み継ぐつもりに父建てし大きな家に今誰も居ず
止まりいる柱時計のねじ巻けば父母ありし日の茶の間が戻る
くちなわの抜け殻白く伸びている実家の庭は静かなりけり
真みどりの苔に覆われ深々と息するごとし実家の庭は
久々に一時帰宅の母が言うこのままここで死ねたらいいな
ざわざわと葉のなる音にゆさぶられ裡なる石がことりと動く
生けおきしてくれないの薔薇ほどけゆくそれだけでいいわが誕生日
抽出しに縋れて重なる美しき和紙いつか何かに変わらんとして
新聞紙ひと月分が変わりたるロールペーパーひと巻として
ひと月に出す紙ごみのいかほどを心の糧と為しえしわれか
遠き夏わが折々に心地よき風を呉れたる古きこのうちわ

近詠十五首

ひと言随想

百歳まで

百歳まで生きると考えて老後の準備をせよ
という話を最近よく耳にする。少し前までは
八十年、遠く信長のころには人生五十年と歌
われていたのに。

昭和五年生まれのわが母は八十代になり、
そろそろ生涯を閉じられるころかと思ってい
た。ところが、突然に百歳まで寿命が延びた
感じで、ことあるごとに、「こんなはずじゃな
かった」「早く死にたい」と呟いている。

振花の螺旋を登る一匹の蟻は蟻なりの目的持ちて
蛭狩より四年に一度のサッカーに軍配上げて夫は留守番
大塚敬節のサインがあると自慢げに夫は漢方の古本見せる
楽しいと言ったり時に詰らぬと嘆いたりして母はサ高住暮し

父が亡くなるまでは、父母はかなり遠い存
在であった。しかし母ひとりになり、ここ三
年は時にはウンザリしながらも、母と密に連
絡をとっている。まだ元気なのですぐに逝っ
てしまうとは思わないが、そんな母に付き合
えるのもそう長くはない。

老いの歌、介護の歌はもう沢山と感じてい
る方も多いかと思うが、今しか詠めぬ老いゆ
く母を、私自身のために詠んでおきたい。

村野次郎への旅(103)

わが青春の村野次郎(103)

千々和久幸

6月のうちに梅雨が明け、その後は例年になく猛暑日が続いているのに、なぜかこの夏は蝉の声を聞かない。たまたま住まいの周辺に樹木や森のないこともあるが、なにか不気味な夏である。

さて1965(昭和40)年8月号の先生の巻頭歌は、「書庫にて」八首であった。一連は先生の知識の源泉であり、また心の拠り所でもある書庫が詠まれている。

余談だが、学生の頃、友人の部屋を訪ねると、真っ先に本立て(書棚)を覗いたものである。どんな本に興味を持っているのか、読書量はどの程度かで彼のインテリジェンスを計る、という嫌みな癖があった。そのくせ、この逆をやられるのは嫌だった。何とも鼻持ちならぬ学生だった。

①春の文字の並びて光るブリタニカ全書限りなく知識を秘めて

②往きし国まだ見ぬ海のはての街にいつつ地図の上を遊ぶ

(往きてまた見ぬ海のはての国の街にいつつ地図の上を遊ぶ)

③書架高き下に木の椅子一つあり心貧しき時は来て坐る

④気になりし語源を調べ椅子を立ち寄りゆく窓の夕べあかりに

(気になりし語源を調べ椅子を立ち寄りゆく窓の夕べあかりに)

⑤へだたりてをりし思ひに抜き取りし聖賢の書の塵を払へり

⑥たまりたる仕事のひまに繕きてところを放つ野外植物図譜

⑦夕焼くる雲窓に見え棚の上のくらきならび光る書の文字

(夕焼は消えんとしつづつ棚の上のくらきならび光る書の文字)

もこんな気晴らしがあつたものかと親しみが湧く。歌集では丁寧に詠もうとしてやや説明っぽくなっているが、わたしにはぶつきらぼうで直截な初出の方が面白い。

③の歌、ここが先生の憩いの場所という訳であろう。わたし流儀に言えば、忙しい日常からの逃避場所。こんな一見無駄ともみえる空間が、実は心を豊かにしてくれる。

「心貧しき」は折り目正しい表現だが、今日の短歌から見れば、余所行きの表現という印象になる。この文脈に見合う格調のある短歌が詠み辛くなっているからである。日常的で砕けた表現が、今日の文脈である。

④の歌、語源を調べるために、先生はどんな書籍を利用されていたのかは分からない。それが詠み込まれていけば、もっと親しみの増す歌になったと思われるが、それは読者の欲というものであろう。

この一首の軸足はそこにはなく、むしろ下句の抒情的な気分にあるのだから、読者の期待は無いものねだりというものである。

⑤の歌、先生の書庫には、普段は目にしたような万巻の書が積み上げられていたようである。「聖賢の書」もその類いだらう。座右

⑧若き日にときめき読みし書の数みな存を向けて棚にならべり

①の歌、インターネットやスマホで簡単に情報が検索できる今日、古典的なブリタニカ百科事典がどの程度に活用されているのか、詳しいことは分からない。残念ながらわたしの若い頃には、こんな高価な書籍には手が出なかつた。いやさほどの知識欲はなかつた、という方が正しいだろう。

プロ野球の某大物投手が、息子が生まれた時、驚喜して即日ブリタニカ全巻を購入したという話を聞いたことがある。最高の賢沢であり、また教養の証と想っていることだろう。

余談はともかくこの歌、ブリタニカに寄せた先生の信頼が基礎にある。ブリタニカは英語で書かれた百科事典として、1768年から1771年にかけて、エディンバラで発行されたものが始まりである。

①の歌、二、三句あたりにわずかに愛着が汲み取れ、今回も書庫の点景として一連の序歌的な役割を果たしている。

②の歌、先生の書庫との付き合い方の分かる歌である。忙しい日常の合間に、先生に

は、正しくは「調ぶる椅子」であろう。これ以上のことは言わずにおく。

⑥の歌、世界地図や植物図鑑も、先生の気持を和らげる対象だった。直接日常生活とは関係のない、こんな地図や書籍をほんやり眺めている時、突如電撃的に詩が降ってきたりするから、詩どころとは悩ましくも得体が知れぬ。作歌の喜びは、計算外のそんなところにもあるのが嬉しい。

⑦の歌、先生は未だ書庫の前にいる。時間の経過がもたらしてくれた一首と言えよう。それだけに歌が情景の後追いになったところに不満も残る、といった歌。

⑧の歌、さもありなんという感じの歌である。誰にもある体験的事実を正直になぞったという感じの一首。先生のお宅は広大な土地に建っていたから、こんな贅沢が許された。拙宅の家のように手狭な部屋しかないところでは、いかに捨てるかとの戦いである。

わたしは依然として歌を絶ち、詩を書いてきた。短歌的抒情を憎悪しての反乱だった。だが結果的には、短歌的抒情と正面から斬り結ぶことを避けての逃避行だった。